

バルト海世界を視点とした近世ヨーロッパ史の学習

神奈川県立氷取沢高等学校教諭 佐藤靖彦

1. はじめに

現在、「近世ヨーロッパ史の学習」において取り扱う題材としては、「ルネサンス、宗教改革、大航海時代」から絶対王政を中心とした「主権国家」の成立と「ヨーロッパ諸国の海外進出」があり、時代としては15世紀から18世紀ということになる。こういった、近世ヨーロッパ史学習の流れの中で、「バルト海世界」はどのように扱われてきたのかというと、三十年戦争でのデンマークとスウェーデンの参戦やオランダの中継貿易の交易圏、教科書によっては三十年戦争後のスウェーデンのバルト帝国、18世紀の北方戦争によるロシアの進出、と、断片的にしか扱われていないように思われる。また、中世ヨーロッパ史の中ではバルト海世界というと、ノルマン人の移動、中世後半期の商業の発展においては北ヨーロッパ商業圏の中心地域、政治的にはデンマークを中心とするカルマル同盟が成立、となっており、近世の三十年戦争でのデンマークやスウェーデンとの連続性が今一つ伝わってこない。

このように、「バルト海世界」はヨーロッパ世界でどのような位置づけであったのか、全体的な流れがどのようにしているのか、がよく理解されないまま学習されてきたように思われる。

そこで、本研究では、近世ヨーロッパにおけるバルト海世界を取り扱うことで、「バルト海世界」がヨーロッパ史全体の中でどのような特徴をもっている世界なのかを改めて見つめ直す機会としたい。そこから、近世ヨーロッパ史の学習において「バルト海世界」をどのように取り扱うことができるのかを考察する。

2. バルト海世界の地理的特徴

バルト海は面積40万平方キロと日本の国土面積よりやや広い。平均海深約55メートルであるが、最深部は420メートルある。後背地が広く流入河川が多く島嶼の数も多数ある。フィヨルドにより天然の良港が多く、森林などの自然環境も豊かである。外海である北海への出口はユトランド半島とスカンディナヴィア半島の間のカデガット海峡のみであるが、カデガット海峡南部は島嶼が多く、バルト海からカデガット海峡へ通じる安全な航路はさらに狭いエーレスンド海峡(エアーソン海峡、ズンド海峡とも呼ばれる)を通航する航路となる。このエーレスンド海峡がバルト海世界の歴史において重要な海峡となる。産業は、バルト海世界南部では農業・牧畜が主要な産業となる。また、スカンディナヴィア半島の北東部(現スウェーデンの北部)では鉄・銅・鉛などの地下資源が豊富である。

3. 中世末ヨーロッパにおけるバルト海世界の特徴

中世末期のバルト海世界の特徴として、まず、ハンザ同盟の商業活動が最盛期であることが挙げられる。その中心となった都市はユトランド半島の付け根にあるリューベックである。その一方でデンマーク、スウェーデンの国内において、王権が伸長してきたことも見逃せない特徴となる。こうした、王権の伸長のなかで、1397年成立したのがカルマル連合(カルマル同盟)である。この連合はデンマーク王の娘であり、ノルウェー王に嫁いだマルグレーテが自分の息子や甥をデンマーク王及びスウェーデン王に即位させることによって成立したデンマーク、スウェーデン、ノルウェーからなる同君連合である。この連合の成立によってバルト海世界の中心はデンマークとなった。しかし、バルト海の経済的支配を目指すデンマークに対し自らの経済的利益を確保しようとするハンザ同盟や、カルマル連合によりデンマークの支配を受けることになったスウェーデンがデンマークと対立していくことになる。

4. 近世ヨーロッパにおけるバルト海世界の政治面・国際関係での特徴

近世のバルト海世界の政治面・国際関係での特徴は4つある。

まず、近世ヨーロッパの特徴でもある宗教改革がスウェーデンとデンマークにおいても行われたことが挙げられる。両国とも、ドイツの宗教改革の影響を受けた。これには、北欧の神学生が多数ヴィッテンベルクで学んでいたこと、中世からハンザ商人との交流があったことによる。そのため、両国ともルター派による宗教改革が行われているが、その主体となったのは、王権を強化したい王であった。王権を強化したい王が教会領を没収し王室の財政増収を図るなど、「上からの宗教改革」が両国における宗教改革の特徴である。

次に、中世末期にバルト海世界の覇権を握ったデンマークの衰退が挙げられる。衰退の要因としてはバルト海の支配を目指すデンマークに反発する勢力が多かったことがある。例えば、エーレスンド海峡の通行税導入に対し、商業活動を制限されないためバルト海の自由航行を求めたハンザ同盟やオランダによる反発があった。また、カルマル連合以来、スウェーデン内での課税強化政策をしてきたデンマークに対しスウェーデンがカルマル連合を離脱した。こうした情勢の中で、デンマーク王クリスチャン4世は北ドイツへの勢力拡大を狙い三十年戦争へ介入したが、ハプスブルク軍のヴァレンシュタインに敗北を喫し、ドイツへの不介入を約束させられた。その後スウェーデンとのトルステン戦争(1643～1645)での敗北をしたことにより、デンマークはバルト海世界の覇権を失うこととなる。

その一方でスウェーデンがバルト海世界において強大化してきたのが、特徴の3つ目となる。スウェーデンはカルマル連合を離脱したグスタフ・ヴァーサ以降徴兵制を導入し、軍備を増大させ、軍事国家化を実現した。その背景にはバルト海の覇権をめぐるデンマーク・ポーランド・ロシアへの対抗という目的があったといわれる。また、デンマークと対立していたバルト海を商業圏とするリューベックやオランダ勢力から支援をうけた。また、グスタフ・アドルフが三十年戦争に介入してからは反ハプスブルクのフランスから毎年多額の支援金を得る事になるが、外交上フランスへの従属が強まることとなる。こうした、支援金をもとに軍事国家化をさらにすすめたスウェーデンはデンマーク・ポーランド・ロシアとの戦争を行い領土を拡大し、17世紀にバルト海を「内海」とする「バルト帝国」成立させた。しかし、デンマーク・オランダとのスコーネ戦争(1675～79)を機に衰退がはじまり、ロシアとの(大)北方戦争(1700～1721)での敗北によりバルト海東岸をロシアに占領され「バルト帝国」が事実上崩壊することとなる。

特徴の4つ目はスウェーデン、デンマークにおける絶対王政の確立(デンマーク 1661年、スウェーデン 1680年)したことが挙げられる。しかし、両国とも絶対王政への移行の背景が衰退した国力を上昇させる手段として行われた。例えば、デンマークにおいてはカール・グスタフ戦争(1658～1660)による疲弊を立て直すための手段として、スウェーデンにおいてはスコーネ戦争での疲弊・長年にわたる戦争による財政難を立て直すための手段として行われた。その成立過程にして両国とも、身分制議会において貴族層の政治的影響力を低下させたい非貴族層(聖職者、農民、市民)が王の絶対性を支持し絶対王政が確立している。

以上のように、近世になり西欧諸国で主権国家体制が築かれていく流れの中でスウェーデン、デンマークも王を中心とした主権国家体制への移行が始まっている。両国の宗教改革はその王の権力強化と王室財政を増加させる手段として行われた。この中で、スウェーデンはいち早く徴兵制を敷き「軍事国家」として領土を拡大していくことで「バルト帝国」を築きヨーロッパ有数の強国となった。しかし、その背景には他国からの支援が必要不可欠であり、スウェーデン自身に「軍事国家」を支えるだけの基盤はなく、次第に衰退がはじまる。こうした、衰退していくなかで、それを食い止める手段として絶対

王政が成立していくこともスウェーデン、デンマークの特徴ともいえる。

5. 近世ヨーロッパにおけるバルト海世界の経済面での特徴

世界史学習においてバルト海貿易はこの地域を扱う上で一番頻出の事項であるといえる。そのバルト海貿易においてバルト海地方から西ヨーロッパ方面へ輸出された品目としては、穀物(主にポーランドから獲得)・木材・鉄(主にスウェーデンから獲得)・造船資材(木材・ピッチ・タール・帆布・麻)・羊毛・毛織物・獣皮がある。また、西ヨーロッパ方面からバルト海地方へ輸出された品目としては毛織物・香辛料・ワイン・塩・ニシンがある。特に、ニシンはバルト海で漁獲されたものをリューベックで塩漬け加工をし、バルト海地方へ輸出していた。

こういった、バルト海貿易を担っていた商人は、15世紀以前はハンザ同盟諸都市の商人が中心であったが、15世紀からはオランダ商人が主にこの地域の穀物を目的にバルト海地方へ進出し始めた。農業が十分にできず、造船資材を国内で調達できないオランダにとってバルト海地方の穀物と造船資材は重要な輸入品であり、オランダではこの時期のバルト海貿易を「母なる貿易」としている。そのため、オランダはバルト海での貿易活動を有利に運ぶために、バルト海周辺国の国際関係に介入するようになった(例トルステン戦争ではスウェーデン側で参戦しデンマークと戦う。第2次カール・グスタフ戦争ではデンマーク側で参戦)。そして、17世紀後半からはオランダのほかにイギリスも進出するようになり、穀物のほかに造船資材や鉄・銅の獲得が目的となった。こういった、バルト海の「外海」の諸国や地域の商人がバルト海地域へ進出し経済的利益を獲得していくことに対し、バルト海周辺諸国ではその経済的利益を「外海」諸国へ奪われない為の政策が行われた。デンマークは、前述したようにエーレスンド海峡の通行税を導入した。しかし、その為、オランダやハンザ、スウェーデンとの対立を生むことになった。また、「バルト帝国」を築いたスウェーデンも17世紀半ば、オランダからの輸入依存をやめるためにオランダの中継貿易を打破しようとしたが、失敗している。

6. バルト海世界を視点とした近世ヨーロッパ史学習

上記の2章から5章の内容を踏まえ、近世ヨーロッパ史の学習において、バルト海世界をどのように取り扱うことができるのか、一つの案を提示したい。それは、「財政＝軍事国家」として近世のスウェーデンを取り扱うということである。

「財政＝軍事国家」とはイギリスの歴史学者ジョン・ブリュアが18世紀のイギリス国家の特徴を表す言葉として名づけた。この時期のイギリスは国家財政に占める軍事費の割合が非常に高く、軍の大規模化、勤勉な行政官、重税、慢性的な赤字財政、債券市場の成長という特徴が現れるとした。玉木俊明はこの「財政＝軍事国家」を近世における他のヨーロッパ諸国を形容する言葉としても適切であると、入江幸二は近世のスウェーデンが「財政＝軍事国家」であるとした。

「財政＝軍事国家」成立の背景には16世紀から17世紀にかけて戦争において銃火器が使用され、戦略作戦が広域化し、線形隊形がとられるなどの軍事革命が起きた。この軍事革命により、よく訓練された規律の整った兵士が必要となり、兵力数が驚異的に拡大し、常備軍が誕生した。そのため、常備軍を維持する財源の必要性が生じ、それに合わせた政治・行政・社会システムが構築されることとなった。

カルマル連合を離脱したスウェーデン王グスタフ1世は徴兵制を敷き、常備軍を創設した。17世紀以降、三十年戦争のあたりからスウェーデンは兵力が拡大し軍事部門に大きく国力が割かれ、ヨーロッパ有数の軍事国家へと成長した。しかし、スウェーデンの国家財政は現物的性格が強く貨幣収入

が少ないため常備軍の維持が困難となり、グスタフ・アドルフはこの問題を解決するため財政政策をおこなった。国内においては、ア)租税において税の貨幣納税を進める イ)王領地や王国収入の一部を上流貴族に売却譲渡する ウ)鉄・銅など鉱工業の産業を振興し、輸出するといった政策をおこなったが、いずれも軍の維持に十分な貨幣収入は得られなかった。そのため、軍を維持する為の費用はハプスブルク家に対抗する諸国、特にフランスからの援助金とスウェーデンが侵攻した土地に対し略奪をしない条件で得る貢納金に頼らざるを得なかった。しかし、これらは軍の維持が可能な貨幣収入は得られるものの、戦争が継続している状況でのみ可能となるため常に財政確保のため戦争をしていることが重要となり、「戦争が戦争を育む」といういびつな状態が続くこととなった。

こうした、正常ではない財政状況を解決するために改革をおこなったのが、スウェーデンに絶対王政を確立させたカール 11 世であった。彼の改革の背景には三十年戦争の終結による財政の困窮とスコーネ戦争の打撃による軍事制度の動揺があった。カール 11 世は現物的性格が強いスウェーデン経済に合わせた形で軍事制度を築くためにまず、貴族へ譲渡・売却された王領地を回収し、常備軍維持の財源とする「王領地回収政策」を行った。この政策を行う際、大貴族を中心とする貴族からの反対があったが、身分議会において貴族以外の身分がこの政策を支持し、王領地を回収するために王権に絶対性が帯び、この政策は断行された。こうして、回収した王領地を兵士・将校や文官に貸与し、そこからの生産物を俸給とし、徴兵された土地に連隊が駐留する兵農一致の制度である「割当義務制度」が敷かれたことにより、安定した軍事社会、恒常的な防衛力の維持に成功した。

以上見てきたように、スウェーデンは軍事制度を維持する為に必要な貨幣収入をもたらすための財政改革を行ったが、それを確立することはできず、カール 11 世期に現物社会が強いスウェーデン経済社会に合わせる形で財政改革が行われ、その結果安定した軍事社会が維持され、同時に絶対王政が確立する基盤が作り上げられた。このように、近世スウェーデンは軍事制度を維持する、という目的にあわせるために財政、行政が動き、「財政＝軍事国家」といえるのに十分な特徴を持つ国と結論づけられる。

近世ヨーロッパを特徴づける視点として様々なものがあるが、この時代、ヨーロッパは多数の戦争が行われていることは大きな特徴として挙げられる。

このように常に戦時状態である社会において軍事の占める重要性は大きく、軍事が国家の中心的な分野となる。こういった、軍事が重要な役割を果たしていく国家においては、軍事にあわせた形で行政、社会、財政、経済が動いていく。こういった視点から近世ヨーロッパを見ていくと、「財政＝軍事国家」とは戦争が多発した近世ヨーロッパにおける主権国家の特徴を表しているのと同時に、「主権国家がなぜ生まれたのか」というテーマを考える一つの視点として世界史の授業で扱うに値するものであると考える。

近世バルト海世界関連年表

※「瑞」＝スウェーデン 「丁」＝デンマーク

- 1397 丁女王のマルグレーテの主導でカルマル連合成立
初代王はエーリック 7 世(エーリック・ア・ポンメルン)
- 1426 エーリック 7 世、ハンザ同盟を攻撃
- 1429 エーリック 7 世、エーレスンド海峡(エーアソン海峡・ズンド海峡)の通行税を導入
- 1434 瑞のダーラナ地方の農民エンゲルブレクトが丁に対し蜂起・反乱
- 1448 3 国の連合王クリストファが嗣子を残さず死去→丁と瑞で異なる王が即位
- 1517 ルターが 95 ヶ条の論題を発表

- 1520 丁王クリスチャン 2 世が瑞王を破り、瑞王として即位
→反連合派の瑞人有力者を多数処刑(ストックホルムの虐殺)
- 1523 瑞グスタフ・ヴァーサ、瑞王に即位(グスタフ 1 世)→カルマル連合を離脱
- 1527 瑞グスタフ 1 世、身分制議会においてルター派新教を国教とする
- 1537 丁王クリスチャン 2 世、ルター派を導入
- 1541 瑞で『グスタフ・ヴァーサ欽定訳聖書』完成
- 1550 丁でデンマーク語訳聖書出版
- 1560 瑞グスタフ 1 世死去。エリク 14 世即位
- 1561 瑞エリク 14 世、エストニア併合
- 1563 瑞と丁の間で戦争が始まる(北方 7 年戦争)
- 1568 瑞エリク 14 世に反発した貴族がエリクを幽閉・弟ヨハン 3 世即位
- 1570 北方 7 年戦争終結・フィンランドで瑞と露が戦争
- 1581 瑞ヨハン 3 世、フィンランドを大公領とする
- 1587 瑞ヨハン 3 世の子、ジグムントがポーランド＝リトアニア王となる(ジグムント 3 世)
- 1588 丁クリスチャン 4 世即位
- 1592 瑞ヨハン 3 世死去
- 1594 瑞ポーランド王ジグムント 3 世が瑞王シギスムンドとなる
- 1599 瑞のカトリック化を恐れる議会在がシギスムンドを廃位
→摂政カール(シギスムンドの叔父)が即位・カール 9 世
- 1602 丁アイスランドの貿易を独占
- 1609 ロシアの動乱に乗じ、瑞がノヴゴロドに入城
- 1611 瑞・丁の間でカルマル戦争 瑞カール 9 世死去→グスタフ 2 世アドルフ即位
- 1613 カルマル戦争終結
- 1616 丁東インド会社設立
- 1617 瑞ロシアからカレリアの一部とイングリアを獲得
- 1618 三十年戦争開始
- 1625 丁クリスチャン 4 世、北ドイツへの進出を狙い三十年戦争に参戦
- 1626 スウェーデン・ポーランド戦争
- 1629 リューベックの講和＝クリスチャン 4 世、独への不介入を約束させられる
- 1629 瑞アルトマルクの講和でスウェーデン・ポーランド戦争終結
→瑞はポーランドからリヴォニアを獲得
- 1630 瑞グスタフが三十年戦争参戦
- 1632 リュッツェンの戦いで瑞アドルフ戦死→クリスティーナ女王即位
- 1635 瑞フランスと同盟
この頃瑞に対抗するため丁クリスチャン 4 世がエーレスンド海峡の通行税を引き上げる
- 1643 瑞軍ユトランド半島侵攻。トルステンソン戦争開始
- 1644 瑞蘭連合艦隊が丁艦隊を破る
- 1645 ブレムセブルー条約にてトルステンソン戦争終結
→瑞はノルウェー領の一部、エーレスンド海峡の自由通航権、ゴットランド、を獲得、
ハッランドを 30 年租借→丁はバルト海の覇権を失う

- 1648 ウェストファリア条約で瑞が北ドイツ諸領(ポンメルン、リューゲン、ヴィスマル市、ブレーメン所領)獲得
- 1650 瑞アフリカギニア湾に貿易拠点建設
- 1654 瑞クリスティーナ退位。カール 10 世グスタフが即位
- 1657 丁フレゼリク 3 世が瑞へ宣戦布告。第一次カール・グスタフ戦争開始
- 1658 ロスキレ条約で第一次カール・グスタフ戦争終結
瑞は丁よりスカンディナヴィア半島南部のスコーネ、ハッランド、ブレーキングとノルウェーの一部を獲得→瑞、バルト海を内海とする
丁と蘭の接近を恐れるカール 10 世が丁へ侵攻=第 2 次カール・グスタフ戦争
- 1660 カール 10 世急死→4 歳のカール 11 世即位。摂政団政治。大貴族が権力の中心
コペンハーゲン条約にて第 2 次カール・グスタフ戦争終結
ポーランドとオリヴァ条約→ポーランドは瑞の王位請求権を永遠に破棄
- 1661 瑞露の間でカディス条約=露がバルト海沿岸から撤退
丁では絶対王政が確立
- 1670 丁フレゼリク 3 世死去。クリスチャン 5 世即位
- 1672 瑞カール 11 世親政開始
- 1675 瑞が丁・ブランデンブルク連合軍と戦争開始=スコーネ戦争後、蘭海軍が丁海軍と協力
- 1679 瑞ブランデンブルクとサン・ジェルマン条約
仏の主導で瑞丁間の講和条約=ルンド条約を締結
- 1680 瑞カール 11 世の絶対王政確立。「王領地回収」を開始
- 1683 丁クリスチャン 5 世デンマーク法制定
- 1697 カール 11 世死去。カール 12 世即位
- 1699 丁クリスチャン 5 世死去。フレゼリク 4 世即位
- 1700 瑞カール 12 世、露との大北方戦争開始
- 1709 ポルタヴァの戦いで瑞が露に大敗
- 1713 露がフィンランドの大半を占領
- 1719 瑞カール 12 世戦死。妹のエレオノーラ即位。「自由の時代」開始
- 1721 瑞露の間でニスタッド条約締結。瑞はバルト海東岸を失う。

《主な参考文献》

- 玉木俊明 斯波照男 編『北海・バルト海の商業世界』 悠書館 2015
- 高橋理 『ハンザ「同盟」の歴史 中世ヨーロッパの都市と商業』 創元社 2013
- 玉木俊明 『近代ヨーロッパの形成 商人と国家の近代世界システム』 創元社 2012
- 入江幸二 『スウェーデン絶対王政研究』 知泉書館 2005
- ジョン・ブリュア著 大久保桂子訳 『財政=軍事国家の衝撃 戦争・カネ・イギリス国家 1688-1783』 名古屋大学出版会 2003
- 百瀬宏 熊野聡 村井誠人 編 『新版世界各国史 21 北欧史』 山川出版社 1998
- I. ウォーラスティン著 川北稔訳 『近代世界システム 1600~1700』
- 谷澤毅「ハンザ後期リューベック・ハンブルク間商業に関する一史料」『北欧史研究 20 号』バルト=スカンディナヴィア研究会 2003

- 谷澤毅 「近世バルト海南西海域における商業関係—ドイツの対デンマーク商業を中心に—」『北欧史研究 15 号』バルト=スカンディナヴィア研究会 1998
- 福本治 「「バルト帝国」の貿易政策(1645～1700年)—オランダへの従属からの脱却の試み—」『北欧史研究 13 号』バルト=スカンディナヴィア研究会 1996
- 古谷大輔 「近世スウェーデン軍事国家の展開—グスタフ 2 世アドルフ期からカール 11 世期にかけての軍事経営の変遷」『北欧史研究 13 号』バルト=スカンディナヴィア研究会 1996
- 玉木俊明 「近世バルト海貿易におけるイギリス=ポーランド関係」『北欧史研究 11 号』バルト=スカンディナヴィア研究会 1994
- 谷澤毅 「近世リューベックのスウェーデン貿易」『北欧史研究 10 号』バルト=スカンディナヴィア研究会 1993
- 牧野正憲 「1397 年のカルマル連合会議に関する一考察—戴冠文書と連合文書を中心に—」『北欧史研究 4 号』バルト=スカンディナヴィア研究会 1985